

帰ってきたカラオケマン 盛況に終わりました

同窓会員である機械4期の水谷龍二さん作・脚本の舞台が9月9日、3年ぶりに苫小牧に帰ってきました。

今年は、風間杜夫ひとり舞台「帰ってきたカラオケマン」。



コロナ禍でのなか、実行委員会で少しでも密にならないよう議論を重ねて公演当日。午後に会場の文化会館に入ったらずで！3人の方が先頭で並んでおりました。それから間もなくまた3人の方が後ろに並びだして、風間杜夫さんファンの意気込みを見せていただきました。

開場前に、諸先輩方から、苫小牧高専開校時代の話やその頃の苫小牧の駅周辺の店や街並みの話を聞きながらの腹ごしらえ。

和やかに実行委員がまとまった瞬間でした。

すぐに開場に向けてそれぞれ配置につきます。



先頭のお客様の前で自ら
対応する副実行委員長の
栗山先生です

最後尾の案内は
同窓生の最年長、菅原さん。
まだまだ元気です！



開場時間になったら中での誘導は
忙しくなります。
その前のひと時、吉中さんです。



私自身、ひとり芝居の観劇は初めてでした。

牛山明を演じる風間杜夫さんのひとり芝居に、どんどんと引き込まれていきました。
青森のスナックの場面ではしっかりマスクをし、お客が帰った後にはしっかり消毒もしていましたが、
牛山明シリーズが始まったころにはこんな設定が必要になるとは思ってもみなかったことでしょう。

ウクライナや前日に亡くなったエリザベス女王にまで話題が及んでいき、上手にストーリーに組み込まれていることに、お客様がどよめきました。

笑いあり、笑いがあってホロリとさせる。

普段、生の芝居を観る機会のない私にとって、とても貴重で楽しい時間でした。
それはたくさんのお客様たちも、楽しい時間を過ごしてくれていたでしょう。

前回までは、キャストや水谷さんとの懇親会が行われておりましたが、もちろん今回は一切なく、舞台上のセットの片付けを手伝って、実行委員としての今年の役目を終えました。

今年も母校の演劇部へチケットの寄附をさせていただきました。
また、恩師の皆様やたくさんの諸先輩方にもチケットを購入していただき、ありがとうございました。

コロナ禍の開催のため、ソーシャルディスタンスを取りながら時間内に誘導できるのかが課題の一つでしたが、問題なくスムーズに開場していただきました。

演劇そのものは、パンフレットに載っているキャスト、演出家、スタッフや協力団体の方達が作り上げているものです。

そして、公演はさらにお客様一人一人の協力があって作られているものだということを実感した一日でした。



最後に、水谷さんと同窓会、他の実行委員と撮った記念写真を添えて、報告を終わりにしたいと思います。